

(・・・着衣禁止・・・)

改めて頭の中でアスマデウスのチャットでの発言を繰り替えすと伊吹はD.D.Dを引き出しにしまい自分の部屋からさほど遠くないところにあるアスマデウスの部屋に向かった。

伊吹の部屋と変わらない見た目のドアの前に立つと、伊吹は軽くドアをノックした。

「どうぞ。」

声をかけられドアを開けると、そこは紫とピンクが支配するアスマデウスの部屋だった。

ロココ調にまとめられた部屋の壁はほんのりとピンクを含むクリーム色で、部屋の中央で存在感を強く主張するセミダブルの天蓋付きベッドを始めに全ての家具が美しく豪華だが男が使うことを想定していないのがよく分かるデザインのものであった。

伊吹はアスマデウスの部屋に入ると、改めて周りをきよきよと見回した。

天井から吊るされた布と同じ色のほんのりとしたピンクを含んだ紫のカーテンに、店外に吊るされたカーテンと同じコーラルピンクのカーテン。

そしてベッドを飾るつるバラの飾りを見ていると、横から声がかかった。

「なに？僕のベッドが気になるの？」

声がかした方を向くと天井から吊るされたハンキングチェアに腰かけたままこちらを見るアスマデウスがいた。

七人兄弟の中ではさほど背が高くない方だったが、長い脚を軽く組んでバスローブ姿でくつろいでいるその姿はまさしく風呂上りそのままの美男子という風で、伊吹は思わず身にまとうバスローブのすぐ下が裸であることを想像した。

「ねえ、どうしたの？」

小首をかしげこちらを見る視線に伊吹は思わず引き込まれそうになると、さっと視線をアスマデウスの手元に移動させた。

アスマデウスの手には伊吹に自分のベッドの中は着衣禁止であることを告げたピンクのカバーのD.D.Dが握られていた。

アスマデウスの口元がふっと微笑みの形に緩み、同じタイミングで愛らしいたれ目の目尻が下がった。

「今日の君はおかしいね。」

そう言いながらアスモデウスはハンキングチェアから立ち上がると、伊吹のいる場所に歩み寄った。

「確か君は、僕の魅了が効かないはずじゃなかったっけ？」

「うん。アスモの魅了は効かないみたいだね。」

伊吹がそう答えるとアスモデウスはがっかりしたような顔をしてため息をついた。

「それ言わないでくれない？今でも傷つく。」

「ごめん。」

慌てて伊吹が謝罪の言葉を口にするとアスモデウスは伊吹の頭を撫でた。

「それより君って意外と警戒心ないだね。ノリよくぼくの部屋に来るってどういう意味だか分かっている？」

「え・・・？」

伊吹はアスモデウスが言わんとしていることを考えたが、自分はアスモデウスに呼び出されたからこの部屋に来たとしか理解できなかった。

伊吹が不思議そうな顔をして首をかしげていると、アスモデウスは伊吹の前でにこりと微笑んだ。

「ベッドの花、きれいなバラの花でしょ？造花なんだけど凄くよく出来ているし、可愛くてきれいなぼくにふさわしいと思ったから飾り付けてみたんだよ。」

「これ造花なの？」

「そう。本物みたいでしょ？」

「うん。もっとよく見ていい？」

「はいよ。」

アスモデウスから許可の言葉をかけられると伊吹はベッドに飾られている花の飾りの前に座り、わずかに被ったほこりを指で払った。

ぱつと見には生花のようにしか見えなかったが、よく見ると確かにベッドを飾るバラの花は造花だった。

紫とピンクが混じった色合いの花びらはよく見るとムラ染めされたモヘアのような布で作られており、葉も茎も色が違うだけで全く同じムラ染めのモヘアのような布で、深緑から新緑の色まであらゆる緑が使用され徹底的に生花に近くなるように寄せられていた。

伊吹は造花の美しさのため息をこぼすと改めてしみじみとアスモデウスの部屋に飾られている造花の飾りを見た。

「・・・凄いなこれ。高かったんじゃないの？」

「んー・・・いくらだっただろう？もうあまり覚えていないけど、これをテーマに今の部屋を作ってみたんだよ。ぼくにはかなわないけど可愛いでしょ？」

「うん。男の人の部屋とは思えない感じだよね。」

「それ本当によく言われる。君もね、ぼくの部屋と同じ位可愛い。」

「!?!」

造花に見惚れていると急に後ろからアスモデウスが抱きついてきた。

驚いて息吹が後ろを振り返ると、視線の先にはアスモデウスの無邪気な笑顔があった。

「ぼく、君が部屋に来てくれて本当に嬉しい。やっぱり一人で寝るのは寂しいし寒いよね。」

アスモデウスは心底嬉しそうに伊吹の体を腕ごとギュッと抱きしめた。

息苦しくはないがしっかりと抱きしめられているという感覚を覚えながら、伊吹はアスモデウスがとても嬉しそうだと思っていた。

「でも、ぼくのベッドでのルール覚えている？」

耳元でささやかれる言葉に伊吹の背筋にはゾクゾクとした感覚が走った。

しかしそのゾクゾク感が悪寒や嫌悪感の分類ではない、もっと別の伊吹が初めて体験するゾクゾク感だった。

「ねえ、伊吹ぼくのベッドでのルール覚えている？」

「・・・着衣・・・禁止。」

「正解。」

のどから声を絞り出すように伊吹がチャットでアスモデウスが書いていたことを言うと、アスモデウスは伊吹のほおに軽く口づけを落とすし伊吹が着ている上着のボタンに手をかけた。

「ここに来るのを〇×したんだから、ちゃんと守ってね？」

アスモデウスの長い指が伊吹の上着のボタンを次から次へと外していく。

その流れるような動きは伊吹の体を抱きしめていた時同様経験豊富な男ならでわのもので、彼が色欲の悪魔と言われるにふさわしい経験を重ねていることの証明だった。

「あ！ちょっと待って！！」

「おっと。」

伊吹は慌てて上着の前を両手で閉じようとしたが、すでにアスモデウスの手の中にはぎ取った伊吹の浮気が握られていた。

「ダメ。ぼくのベッドでは着衣禁止がルール。って話はしておいたでしょ？」

「うゝ。」